新沙石集　一　（正徳五年版）

椙山女学園大学デジタルライブラリー

椙山女学園大学図書館

新沙石集

ひらがな　一

新選沙石集序

無住和尚ノ沙石集世ニ行ハレシヨリ以来。戸戸ニ傳ヘ。家〻ニ誦シテ。興起感發シ。三寳帰依スル者。鮮シトセズ。謂ツベシ。断迷ノ利剣。勸善ノ策鞭ナリト。予モ亦随喜ノ餘リ。吾朝ノ事蹟見ルニ随ヒ。聞クニ随ヒテ。アジキナキ。スサミニ。綴リ集メ。顰ニ倣テ。新沙石集ト名ク。沙石ニタクラブレバ。其事ハ舊タリト雖ドモ。所謂ル。

故ヲ温子テ。新ヲ知ルノ義ニ取ルノミ。唯恐ラクハ。言語浅陋ニシテ。事実差忒多カランコトヲ。然レ𪜈。順逆共ニ佛乗ノ縁トナリ。歌舞モ亦是法音ト為ルニ。足レルトキハ。乃見ル人沙中ニ金ヲ求テ。一タビモ。随喜感歎セバ。此書ノ流行古集ニ並デ。勧化引導ノ一助。無ンバアラズト云フコト尓リ

元禄八年臘月上浣

桒門虚舟子書之

新選沙石集巻第一目録

阿弥陀如来同位乃事
本尊法花懺法によりていのちのびける事
玄賓僧都さんせいふるまひの事
唐乃師东めいどうりうへ帰る
小児念仏れたごく後ゐの事
道信禅師乃事
波斯匿王国の珠をぬすミ佛になる
尾州娘清子息さんせいまうぢやうふ

新選沙石集第一

阿弥陀如来因位の事

梵因むかし世娑婆せらいと删提嵐国と申せし時一人の轉輪聖王おはしましき其の名を無諍念王と申そ其ひとりの臣下寳海梵士といふありけるりんくして諸々の道理にあり貞信たゞしくみちをよそむかず官位進退規矩よくかなへり志ありといへども家業をはぐくむ子なきよしを天神よりのぞみて一人男子をうけてらうかんおもやかにして春の花よりもあざやかに心操秋の月よりも明らかなり父母これをいつくしみ究眼精をまもりがごとし世の人

されどもひろうする文かぎりなくして種々の寶珠あつむれば童名を寶藏（ほうざう）と名付きぬ其子漸（やうやく）成人（せいじん）するにしたがひて世の中の轉變（てんぺん）を知り有爲（うい）の法常なきをおもひて佛道にいらんとおもへど父母遮惜しけれ云。然るに年たけて七寶の瓔珞をゆづり一家の棟梁（とうりやう）と成ぬ。然るところのまへに無諍念王にまいり輔佐（ふさ）宰相（さいしやう）の臣（しん）なれども御念王は出家せんといひかうこそくちわしけきとてゆるさゞりけるに欣求（ごんぐ）菩提（ぼだい）の心深（ふか）くしてつゐにすゝみて出家をとげて發心修行（ほつしんしゆぎやう）の身となり現世（げんせ）に成道（じやうだう）をとげ給ひ童名とおなじきにちなみて寶藏佛となづく時に寶海梵士（ほうかいぼんじ）我子のかしこくなりそのまへ詣するとうらやんで寶藏佛のみもとにまうでゝ説法の時かたりつゝ如來父の大臣は來るをよろこびて大衆の法をときたまふ大臣歓喜（くわんぎ）したちまち雲靉（うんあい）と靆し佛に隨ひ無諍念王のみもとに參じ来る有かゝるくと奏（そう）せて大王されとききてたちまち佛のみもとに幸し給ふに千車轅（せんしやゑん）をおしつめ萬騎（まんき）轡（くつばみ）をならべて紅塵（こうぢん）天（そら）に立て雷電（らいでん）地にとゞろけるごとくぎう給ふ大王のためには大乗經を説給ひしかば大王信受（しんじゆ）ましくしてたちまちに道心をおこし八十吾の莊嚴の玉冠（ぎよくくわん）を捨（すて）て方袍圓頂（はうばうゑんちやう）の身となり

あまつひ法名を法蔵比丘とぞ申ける。菩提の三摂九様右の千官百家をのく海をかきへみこ錦をしろかへりいちんや綾羅とさり薦とちかる石妃宋女は朱唇玉楼の上に綾錦繍を織て衣としうちわら竹陸寵臣は紫殿宝閣の下にまかりてし。それそのほかうきひくに樹下石上に端座して。我正覚の後たえもじやくと利益せんすと五劫まで思惟し給ひて。三福具足し。三身とそなへさせ給ふ弥陀の三字を案じ。極楽浄刹といふ荘厳微妙の国に三尊の土をまうけて六八の大願を成就してその中に一念十念も西方浄土と称ずるひとは弥陀

の三字をとなへんものは八十億劫の生死の重罪を滅して。そのあとはむかへんといふ願をかうし給へり。つくとりけく韓師称讃も。乃至一念十念往生すと数へ人おほよそあやうくしくの行おこなふは弥陀の念仏のりまさくいなしとかめ給へなりとそ法華法花懺法まじりけてくゐちとのつゞる讃言法華といふ人あり。荊州玉泉寺の智者大師のみなもとなりたる長広といふ相おあり。三世のまくらしぼりて法華長広を講して会に相人の云晦朔に死を二会ひ相ありといふ。法華たどころさて玉殿ちるまゆきて智者大師に此事を告給ふ。

大師の云上下の神祇に澍雨をこしても定業にはいさまさくハ轉じがたしたとへバ法花圓宗の法談のミにて法性一如と云て定慧と論ぎしてぞおくれハ圓頓の至極と云て法花の懴法とかくてありんといひさらぴおれにより て二七日の間法をおこなひけるに一心敬禮の香煙ハ二七三時のあかつきに玖葉をとり六根懴悔の道場にいまひます靈けれ霧ゑとりさつきて斉七日の朝にわたりて法華感夢とかうむりて善實大士白象に乗して枕にこうかうし。多寶塔婆地より涌出せり。その塔に銘あり云法華が生ぞへ合さ末みかとされりぐといふて文七十四にして生

ぞへ給ひしかバゆめのごとく十五年のかなしひとのがれたとえひそくゆめさきををそらしけ身の智をもとめしかバとりこうにもどりて云戒は法の力なりと云て三七日の間行法と六七日に結願をせり。又その長廣とめしてうへしもあみしむる小桐して云つかなる多まりいまけしらり十五歳のはじめちのびそり候と申そう。ひそく法師ふかしに法花妙典とぞくを玄書写してかんきが正念にして行年七十四歳にして命をはりぬとぞ云こ

玄賓僧都とんせいの事

和州山階寺の玄賓僧都ハ三論宗の碩徳也空服

中の三諦は金剛の炎に焼き、境行果の唯識は寂光は浪に切られけるにて、奈良の御門は法帰依ありて大僧都に贈給ひけるを辞して和州三輪山の麓にかすかなる草庵をむすびて栖たる暮山に薪をひろひて宮をとゝのへ昔さしく遊居に水を掬では月我とたはふるゝ痩ては桓武の天子その逸居ときこしめしてこれをめさせ給ふ中使ことごとく人にあらで松風の夢をやぶる陋巷はのまどに蘿月のしづかなるをさまたげしからず其の執着に

三輪川の清き流にすゝぎてし我名をさらに又やけがさんと讀て辞し奉りし後は人しも

名をかくして終に隠てうせ路に交べき事をさけりしも其ころより数年を送りて弟子也ける僧越路に下向しけるがわかれけるに大津に望て渡守とやちかゝりて船にそこそこの渡守の形見れば老たる法師のきたなげなる布の衣を着そのまゝわらおやし袖の楫にやと思ひ見と見え給かどにその面貌かはれるがでしもしく案じて見ぼりて年頃法にたづねん我師の僧都の法躰なり。いとあやしくて此舩のありけるとほむつきさりけるがくもてなし人目を忍ぶ世を渡らひかの僧都を見さへつれるまゝにかし目も見入ければ人ゝ舟から

わかれてそのゆくゑくもゆきけるまゝ此人行
方もしらずゆきけるに今ぞそこにハ中〳〵しれざりし
ところにて新しきつ道ぬけて上洛の時西の
かたへ居給ふにあわりしんとその里人にとひければ
さやうの法師ゆうき年来北陸の渡守しておりし
しが下臈ども欲ぬきて叔くま紀侯とかるまもく
かゝるいやしけれども昔よりまんと澄して念仏
只今かちに食物なんどとらけいハ貪そそくまつる
もゆしきりしかバ道場の村老野翁みかたちにハ
そびゆしがうるあつかわりけん道あるすまうき消
やうまう世をくゆるそへそと忍ひしきてしもぞ治りける。

隙まなしく光陰をてぞ月日を勤れば秋の人おもひてし
時なりかくれやすき心をもちしはせしじとて文玄あなまゝこそ
とぞひとしくもあかれしもあへけるそ彼の僧都ハ
備中の国まいそこりて山田乃郷まありとくしきつゞまま
訴とて退けりて山田寺僧都の坐しておハれねれ
秋たちそめれいそふ人もかくしと詠じけりとや

唐の師承恵途しりけりくハなるず

漢玄唐ま師承といふ人ありて二十年の名教生あの罷
業まりかりへまいそく一分の全根もれすてし一錦の運
余月人ともする時まさきそえあわ秋玄若とゑん
そりちぎりさて相人ふるそ相者の云玄夢なり

かんぢうのちかしくはゞ人の家の見へざれば雪に
て百日を過せしかいのちかはりぬ。かくれ住(すめ)る人ぞ下
し家妻子をすてぐるかし家内の財寶一つとして
ゆるさずかくるすかくて紙に出行おもひハ森をめ
深山と越おもひハ瀑にそゝる野と過て足にまかせて
人の家の見へんとハ雪とかくしてゆくが、ここに船路ゆき
てはをかうち藤よりゝ人ハ探る童二人来て従
船といふその時師東思ひて目をそで西山にさ
ふくろてし文字も分いと切しとおもひ来
とりくしてのせそう童りてのかえようろご
ぶ衆しきわら病る如法飢えたる風情と見えて

此弟子の手まで食をもして持ハ帰りハくるしく給
べきとのひさくくりせしむ。とかくとぶらふざらかし。師
宗同云、和尚いづくの者の人ぞ。誰が家の者ぞといふ。
童あとへて云、我ハこれ瑞巌大王の侍従なり。唐の師
東といふ大悪人あり。かれはしてまのれとつかさとしせしも
そこ師東師界をちかふるぐざらかし。我夢にまみえて
つかいはるかにきたれり。もし今いくさもかくのごとし名
余にやと思ひてわれのまそぞかくかくけりつ。其時童
のいりくさそいふ床にそがし。ぞしさめ但し此今飢とた
きけ跡ある真實の法なりせんぬもし法かり。ト
かくしたるいかんぢゞとそとえけて同業同性の人

そのとき閻王のりんにまのへしけれハ王なら
それがし今七日とやさん時よ又しろひまかいは
こく玄貞師弟が勤はいはからかし又七日と
いふ日の童子なるてやまやう救るかんぢうまうさけ
おりて罪人まそりかへて代れたき王志かうめして汝
のわかの勤行まそくいへば今もちからもとしうびまいす
御请は合とい師弟は道の苦志やはくしかづらし
御身としいへ定業かぎてちわりかくしとついて即時
に蝋とそちいき泥のぞ閻魔王の御庭に跪坐
体おとめく勧文の箱車二三両つみてそらぬーけ
業は消の座にのぞまがうし一分の舌根出れぬとと

いふおとこありけるがんびそろうて師弟まうつけて玄関たち
あんまうの阿まんへまいそへさるまいは我も安堵して
法花経一部をさかしまにいふ願をかけまいりしぐわん
たてまつるところかれもかせしとして師
弟が三十年の精勤微塵ばかりも舌根しもそ也
まうそ窮のつくとも滅しそのめのにぎりそ妄語
とがにもいふとさ云業のいかくさうらけれ共只ひとへ
しくらうしにとて師弟と見えひとて悪業あそ
あぶれりきりの世でやく苦ちぐらくいようつかさと
ときさうがかくうのぱかりしきのわからんきんかうきかく我ま
舌根あるのさうまわろしぼさやまいまで法花経一部書写

養しまゐらせしを頼とせしかりしにとかくとして人
のがるゝ方もなくて心さし虚空に極りけれハいよいよ罪
業深重の人なりしといへども三世諸仏の出世の本
懐として[illegible]法華経の名字を
きく人ありがたくこそまれなりといふ願をおこしてそ
とゆきたるかくもなくもわりがたくしてやしんでや
まゐらせしとてもきそら師弟法ての[illegible]
して法名を頼道と付法花を読誦し無上道を成
ことを誓ひとりて書写しまゐらせんといひてそれを
定め日の業をまもりてやだよふ人をつかはしく
経をたづねまゐらせいゝんやうやうとの願をか

うつして書写くやうせんとやは経の力用大にして
その縁によりてもいよいよ[illegible]なり
小児念仏のくやう成けるす
和云菩薩一人の縁ありつけて阿弥陀の念仏をとなへを
妻二人の子をもうけりその小児父乃念仏をもちゐ
まゐらせてぞ三つをとりてつゐにその名号をとなへ
その母もとりしく居そくとしきとして剃髪をけりわろ時
一人の子小病に煩ひて死ぬ炎魔法王は小児をとりん
てのをまりく早世をかうく念仏のくどくに依
ところも小年のちのちをかうて深しけれども西方浄土の
七宝荘厳の池にとあそびてとむらひて[illegible]のぞむ

ありしむかしふだん海より小児（せうに）に安養浄刹（あんやうのじやうせつ）を見るを
しめ給ふに黄金（わうごん）の楼台（ろうだい）には無数（むすう）の天人（てんにん）遊戯（ゆげ）し。
珠玉（しゆぎよく）の殿閣（でんかく）には恒沙（ごうじや）の聖衆（しやうじゆ）充満（じうまん）せり。宝樹（ほうじゆ）林池（りんち）
は表裏（ひやうり）に照曜（せうよう）し。鳧雁（ふがん）鴛鴦（ゑんわう）ら遊漾（ちんさん）にむらがり
さへづるこゑは哥ごゑして舩のうかぶがごとくにそよぎしく。
花とちる玉もおもわらふ小児（せうに）池（いけ）の辺（かたへ）におもむく
あまくれなゐの蓮華（れんげ）の五色（ごしき）のひかりとちるをみ見ん
並は風の一息微妙（みめう）不思議（ふしぎ）の大乗（じやう）一実（じつ）の法文（ほうもん）を
宣説（せんせつ）して花のうち化生（けしやう）するもの人無量（むりやう）なり。但し
その中に二つの花は人なしとふだん海大王に二
ひらきてまうしていはくなにゆへぞ人多く化生（けしやう）せざる

なか中に人のなき花二つありやとゝまでふだん海まう
すやうていわく汝（なんぢ）らよてやこれはなんぢが父と兄（あに）二汝
と生（しやう）ずべき花ぞといへば小児（せうに）かさねていはく我母の
花とといはせざるはいかにといへば大王のいはくなんぢが母は業（ごう）
障深重（しやうぢんぢう）にして仏法（ぶつほう）に帰（き）をはこばずさへ子たちの会に
も障碍（しやうげ）をなすがゆへにむけんぢごくにゆくべし。
いかでかあくらくせんにはこの花わかれといふ小児（せうに）涕泣（ていきう）して
なげきてやゝしばらくあはれなるかな我母の罪障（ざいしやう）わびふかく
まさにつまれなるとやさし父母不孝（ふかう）のものとなり
ちくしやうして我母とともにまゐらん我はこれ幼稚（ようち）
にしてかゝやくさきに立て死せり。これ不孝（ふかう）第一の分

ありしときゑんま王のいはく罪人あくをつくる。罪人苦(くるしみ)をうくる事はなはだし業(ごう)ばかりの果(くわ)をかうむる事ゑんまも〻じやうみかくのごとしといふ児をさけてかさねて願(ねがはく)は我七日のいとまをゆるし母まんだらやぎりまうしけりしと母もよろこび善根(ぜんこん)を修(しゆ)せしめんといふ別七日の命をゆるし返へりぬ小児(せうに)冥途(めいど)よりかへり母と呵責(かしやく)して善根(ぜんこん)を修(しゆ)せしめ七年後ゑくつねは蓮花(れんげ)とえむ〻うちむかり

遊僧禅師(ゆうそうぜんじ)の事

漢云(かんいふ)かうさかん禅師といふ人は修(しゆ)は如(ごと)く僧(そう)くらぬ嶋鷹(てんぺん)をさるかまとつかふ世を早(えう)しして

ゑんま王もまたよもつらそうぞ時ゑんま王まゆしよせて。といひ手まはりくわんぢきやどよりしてげんあり善(ぜん)とも修(しゆ)しあり遊僧(ゆうそう)ねらへてやしきく我いまそこさんざんかしといふ。ゑんま王よき我もさるまでいかゝまさかれざりしとおさまし悪(あく)人なりともやくちぢらくへつらいもそへりとさためそでまふ時火車(くわしや)たちまちに現(げん)し十方より皆来集(らいしう)してゑんま王の勅(ちよく)をうけてちぢらく具(ぐ)してゆかんとせしとき禅師(ぜんじ)わうゑりのあそしさまやきく。我もやたよわらし時一念(いちねん)弥陀仏即滅無量罪(そくめつむりやうざい)と云文(もん)をとなへりはたとひ善根(ぜんごん)を修(しゆ)せずしてもくとつくらば百たび弥陀仏ととなへたるすら一遍(へん)まうさ

らにすんぞちぢむくましきかうべきぞりし我なうく
まへ道さかうべからんと仏と二人ともにかうべきとや
うのかしけるな積いうらなかりし故にといへども
はえん悔かうまうかんぢ懺んなりとをいでんろ
りざいこうとのべさうぞづくてよくわきしぬちうてと七
度まで還俗をりぢぢうわくのち持法の名也唯除
五逆誹謗正法とおはれこれによりて阿弥陀如来の悲願
もとうけうけいよいよかぞうちゆんやくさくて七度の還
俗をつとめしかど儀なれども七度の出家してく
いまだかうぶこれるとやりしても二子出家七世父母み
な得脱と得がとせうゑてうけんやかずとわひてもいう

てり得脱かくらべきしとそやけるちんの海にうかんちぢ
いふ事そのしりれこうもずくらくへまゐりてのうらと
佛あこれらう時に釈尊のとかれ候をたうとみ遊び遊
くとんぐ耳に此歓喜にへておちまちて火車たち
まちうさりて天竺をもやうにまさちうたらくのごと
く七度還俗のとのみにも火車を葬ふべきうかんや
一ん道殺のそらたら天竺をもやうにしらんこうんや
此新羅王国の瑞とぬきそ佛道に入り
元暁むかし佛となりて慧海にかうしけ時彼新羅
王国の舎ぞ霊へそら齋りも蔵にもあす
あり。これ寺院とかぞうり法会とそまらけんがためなり。

あるよ給ししけるまゝ此珠寺中（ちう）にまうでゝありしころ
まかりおほしめしの中にゆへある塗人（ぬし）ありけるを
もろこしのかなたへ人みなかよひて出されけるにて大天（だいてん）
してうかひける丸二度（ど）かりしかどさうしひけさいかう（ちう）
とよりて兎角（とかく）しけるうちにあるきちて己（み）の志けりと
わりそしけるに思ひけるに三四度さるいよい此塗人（ぬし）は
くろしひそりげんもよく薬酒（やくしゆ）をもとめてふかく酔（ゑい）し
めし沈酔（ちんすい）のうへには毎事（まいじ）銅銭（どうせん）時々（?）にも荘厳（しやうごん）
とつくきをる奇麗（きれい）の宮殿（きうでん）に金銀（きんぎん）をちりばめ瑤樓（せうらんろう）
闘（?）にやすらくをかざり霜寵そなへ美丈夫（びぢやうふ）嬋娟（せんけん）の妓（ぎ）
女（によ）をそのそばにわりつけそとんぐくそうし筆（まの）わそだ

せりすられがをしひきむかとまちけるに夜（すて）すすりて酔醒（ゑいさめ）
てゆかりをみるにをしくねせるはおそしてみな夢人
かれは美人（びじん）かまり天上ありとやうくわんとおもひてこれは
いかなる事ぞとをもふの妓女（ぎぢよ）は忉利天（とうりてん）といふ処（ところ）也
なんぢらんふぢいひして闘（とう）まの寶（ほう）をさら如意（にょい）もう
さむるに又とかれそそのゆへはおめの度（ど）にまいとうけそり
と云はおきがしくうちわんしてそべてさるるにこそ覚（おぼえ）
給ふるかとらうへはおや度もうちかなぞぞなまて文
いもせんし議（ぎ）きるにおる智臣（ちしん）の云（いはく）此塗人（ぬし）は
めしつかひて吹（すい）?渡（わた）國（こく）宝蔵（ほうざう）にたつさはりしめいばかり
いかなるとおもてまちかんし云さもあるへし其（?）満（やく）つかれ

けり行よかしこく賢にして武勇(ぶゆう)才(さい)智(ち)ありければ。次第(しだい)に進(しん)で参議(さんぎ)となりおほいさんのちには大殿(おほとの)の位(くらゐ)にのぼり天下のまつりごとをとりけるはいふまさとぞなる所(ところ)なし此時に大かたそものの殊(しゅ)はいかにとありめかしとのたまひけれは大殿(おとの)そのむかし国の宝(たから)寶なから守(まもり)てうせざてとくぶつをとぞそてまつらぬがあたら大殿やしと為とぞ為りて武家(ぶけ)仏んとやすぱ大きゆうきさむまひて今は天下の父母(ふぼ)としてまつりごとを進(しん)じさそるらんよは何のとそる本わりそら世とのうばてんとらよやのさまひけりは大殿やさく殿を仏法(ぶつぽう)の興(こう)あたくさむかりのありけむとめらてまんとおひてんのちずず

ゆゑまつりごとに僧(そう)の法門(ほうもん)をたえき随(ずい)ふるとなんいはれけれは猶(なほ)の人は国をおさむるまうけし天人はまゐりて守るるはまれなりとてそこの忉利(とうり)天をつくりまつりし所まさしく此の天上までもおとらんと見(けん)えてげにまさる仏をはじめありつづりてはみまては妓女(ぎぢよ)国とてく事共よのつねの人あらしまに心得てさらるを仏をなそといはれけらし也その時うしろありけらし男の大きままちの者のとあしまでいはず宮官中職(くくわんちうしよく)とけりままで思へはあの僧(そう)の説(せつ)し一縁(えん)の末(まつ)也選帯(めすくまれ)とおもふにくやしきしと称(しよう)ちらあらば為しのんまてとくるなどでさらりと見しうんるまさしきまうしづびるがしされど

いと悔やしかりて、やむことなかりしと懺(ざん)悔ありしとかや、け
るは悔てとれとくゆるまれはそれにぞ紅蓮(ぐざう)にへく
ときかひけりては世みな不牢固(ふらうこ)如水沫泡(みずまつはう)涅槃(ねはん)と観(くわん)
じては瓦礫(わらんくわ)漢果となりそくりけるも也

尾(び)州職清(しきよしそく)子息出家のやうの事

私云(わたくしいはく)かの者長鴻郡(ながしまごほり)に稿(ごんのすけ)職清(もときよ)と云富有(ふいう)の仁(じん)
ありその嫡子(ちやくし)を清道(きよみち)といへりけるが、くさんなりけり
猟漁(れうぎよ)を業(げふ)としてさかへける因果(いんぐわ)の理(ことはり)をしりて後(のち)
に壮年(さうねん)の比(ころ)南京(なんきやう)東大寺(とうだいじ)の大仏(ぶつ)くやうのありけると
き結縁(けちえん)にて父母(ふぼ)われしに同道(とうどう)して上洛(らく)し是(これ)を
見物(けんぶつ)するに入来(じゆらい)ける京(きやう)の者(もの)貴賤(きせん)ちやうりん隠逸(いんいつ)

の在様頸(くびすぢ)をつぎかさねとかやしるし稲麻竹葦(たうまちくゐ)のごとし
大善法会(ぜんほうゑ)のありさまをおもひとりけるにも清道(きよみち)こ
ゝろに過去(くわこ)の殺生罪業(ざんしやう)しらん心中(しんちう)にてはさんげして
身もたりやかてこれより因縁(いんえん)のありさまをさとりて捨(すて)家(ども)
実無為(じつむゐ)の山にも入(いり)たやしとおもひしのみあかりけるまでも
とゞまれい中くらかひがうしといひてさりぬ祈(こい)にまかせ
むしてすぐにあへからずほりとひきとけるにひとり
のぼりきて即(すなはち)大仏(ぶつ)の上人へまいりて剃髪(ていはつ)に家の世(ぜ)
いのちをもらひて上人へゆつりおきなをもしてこうくおわり
さ悔さんせいわるべき今はわしきるゝやのつぎの外
いかかる人までもし悔そぞけるかる故(ゆへ)にかかりし也

ぞやといひ給へば清盛の云我は尾州の者也常に
そらでしらする哥も侍しまで観揮くらふして田蘭
多し。高野の畢りかし心練世の形をやもんぞなら
つまじい人でも菊伽藍くなやう久日よりはかりんみもうの
業若の中と思へば若衆に無常の行宮ならり覚え時は
と翔ちんあれはよひてさりかつぎ妻子を捨へやすまた
仏法と称ぶまち也しもぞしんはくしと是とさて
あまかひておこさぐとあびしわりくさされるな我身
子しきらわそのみずわれどもそれはみな世よなそら
生てうたは心ならそれこそぬしとは世をなそこらん
ふもそすぐよりこくとそらんとて家かーとうらは蓉

すゝくとおもひそりぬとうちよに云我出家せんと
おもひて間とおしその日よりうき世の夢とさますを
むしと称やへもへで小紫我りしゆめのあさ結ひてみ
これめぐくるとおれがゆめひのあさんもあり也
と思ひきりて保ちなりとぞ申けるかくて朝よりとも
山座に籠とこもり文ハ雲巌畔に薪を負給仕をて
修しは他にてとあるゝ也あり三年すぎて後宗ある
ならざしと見ん角をまひ仰し上はきんの行ち也あれば
高野山へ新別所と云所あり我ちしめ玉庵を也
法界宮との霊魂をうら入念をて念仏を流しし捨
来までわうの称びひらりが絶るなあしのりて我

三寳のおんしとゝいきてめてかれすまつりつゝはやく
その身はつねにありひてかくては念仏三昧にひ
しほへとのさかしきまけまけれは清浄へ道ゝけりは郷に
かくても修行そなくはかへりて俗塵の境界にまじはりぬれは
それまのくちおしきは女人と生れては妻女の身にも志
のびざらく小児とみては我子も先だちて成人せる
まやかへんと思ひは出家させてやかりしなく覚え
ひ故に山ふかき栖居にてその身のたち隠世ずかへるにも
さらには似るまし師匠にうしくぬかそてまゐらせんとする
にそ仏菩く修れと云捨て高野山にてその身おもひける剃
みの往生院の女四人乃内にて菩行月日送とり

さりぞそも尾州の父母は我子乃ら世みつしらり證
さいざうへ向国藤出まいらせてかくもなくそうて
けまでも借くはその行末をきゝてもなしぞそはひ
世にあるさまやとぞくその幸福わかちく人家嫡冥用と
器量容儀といひ随分大なる者の子なりけれは銀
も金を今いつのみちきんとぞかりしらまてもうひ
ぞありしそはたるもより年月を過し高野にわりと
修へこそ僧ともいひてつらくつぎそでには思ひ成女
まへかみちかれはのきまんするいはきんうにふえられは
畜ものも霊験の山寺多しちかきちかくもとき
ひこりつ文が邪見とも教誨し母がちゝのきてとも

かりひそまりて善性禅子の珊瑚嵐あのむちしれ孝にかわりしく浄蔵浄眼乃妙荘厳王とけせしにをひとしらんの色両しの孝あるべきつゝや今雲霞天に屯して山川みちたちふさがりぬ子は去て南山乃雲に隔つ親は老て白髪の霜に濡し。倚立九回腸をくむすけるに一擲激と消息とうきさ送りけるも我とは去ぬ旅きれとおもひめへしと思ふるしておつるにかしくべきもまいそ父母はひくそうそうしいる暇にのかりし一度見えしもみるもちんとて丈婦淡類とて奥しての衣きるいこそ難けりおしたりの山路よのぞみて攝径に草深して

情はまさらひくれて野原に宿をとれば猿啼の友婦ありして魂といひつまりし日数やうやくつもりて郷野山のふもとに天地と云所まできてそれまで聖とるびおりてそまいかんしそうけの親子の中こそわかれわかれぎしも容貌美麗にしてまろくさうんありじるそぐるいぞれかもと見んえむ座を叩とろへわさましげなる麻の衣焼香のそでりにふもとにゆひつゝあかる昔乃枝はわれたるつゝまくちそて久甲父母もの所なる両と見つかはせしかしくらりも今のくて間もくれもにもさりそり日来さけ使またなる九たりくいいひくて気けまて顔は兵は山に

まかり入し時ぶつてびおしとおもひさだめてはちかれ
たゞしなりて家とはおもはずすく覚悟(かくご)なり今
いと由さんたゞまことにこれまでは[illegible]りて也也今日(こんにち)より
里のちゝ父はゝのゆかりわかれをもいでわかれまゐらするわがほ
これがかぎりにてはべり我(われ)とふびんとはかりしめすが
心をかへして仏道(ぶつだう)と移りひ給ひ[illegible]世にてたてまつる命
の程をしらすあさましき我も人色とこれさへたのみ
しわれはそれ稲妻(いなづま)電光(でんくわう)のそのわかるべし
ことばもなくおのづからそくへりけるかの命
盡(つき)もとひわかれて悪(あく)しくこれまでのゆかりは者先
面(おもて)とむくゆ身も覚(がん)えさりけ也は人これをてかつす

物のあはれのこそ身つくさのかく離(かうきう)れては伊勢(いせ)の
山ぶかく又吉野(よしの)の川の露そゝける二見(ふたせ)の別(わかれ)とうし
こゝろ父母は聖(ひじり)のたゞまことに高野(かうや)山にて雲井間(えんりん)の草庵(さうあん)
にうつり住(すみ)て修(しゆ)行まなぐへり衣食(いしよく)おもひことをかさね
くより剃髪(ていはつ)して高山(かんざん)にとゞまりけるとやうへしきもん
もさながらりり今よりのちは以後(いご)は法とひまでしとやしれ
みか法窟(けんくつ)にまいりてわきへずつくしき人絶(かく)して我れ
めしおきてるをまりもまり鶏(にはとり)のつくりてひきとりけ
前三年(さうゐん)の草屋(さうをく)とも居所(きよしよ)にしてくる老僧(らうそう)にわかれへて
我身はさすらふる旅客(りよかく)となり一所(いつしよ)の浮雲(ふうん)のごと
し日にこれ湯(ゆ)ともなりせしも浴(よく)せずして年月をかれども

衣(きりの)わしつかはれ薔薇(てうかう)たし楼(じんせつ)のちりひとともに来迎(らいかう)
の時ともつはしまで生死(しやうじ)の舎といひしひせうの夢(ゆめ)
常(じやう)と観(くわん)ぜしりしんのりしまいつる時は流去(るいと)といふた
於見(ふみ)までもあづかりきて浦役(ふやく)のうへまのかりそらん
足をとろかしもまいづ不浄(ふじやう)いとのくやうの肉よわり給(ゆうん)
ぞわしかれまうのといひしりんといへりば又孫流(けつとう)の中より
さたまづりんへわま世で秘とこれと葬(さう)せら骨(こつ)をひろふ
てかさめけるていは父母を葬(さう)をろかでしは西山(ざう)まの
がりはしめかり奥院(おくのいん)の入堂(みかどう)をとろるかみ日とこさ
らば風(ふ)雨(あめ)霜(しも)雪(ゆき)をたのしふるまそく蓑(みの)笠(かさ)を用(もちゐ)
させるべもなしおろ人同(どう)く浄土(じやうど)を禅(ねがふ)ふ事(よの)給(たま)
身をすゝめくして念仏(ねんぶつ)の功(こう)をうちきぬへしといひける故(ゆへ)
まなぶ者とかしまさずといへるはおしへていかく世た末(まつ)
代(だい)かりの身は凡夫(ぼんぶ)也遠(えんど)るゝ又転変(てんぺん)もをそ深く心を
付(つく)せる此時ましまさじやうとそげんとおもふ故(ゆへ)よ身
命(みやう)財(ざい)ともおしまじとて當家(たうけ)の後七八年やわらきん
くでて死期(しご)をしりてとかる病(やまひ)もなくて念仏(ねんぶつ)する数ま
とうへて座(ざ)してとらまそり時よ端的(まうてき)合掌(がつしやう)高声(せい)
暁(あかつき)聖衆(しやうじゆ)の来(らい)迎(がう)をあふぐべく蛍火(けいくわ)千万(まんでん)燈(とう)籠(ろう)紫雲(しうん)の姓
とうしげやそうかもしそれ尽めせうの庭(たうゑんどや)心(しん)なわけかく
とうりける往生人(わうじやうにん)也といふく

新選沙石集一終